

## 神奈川県平塚市の越冬期メガネヤチグモ上吉沢個体群

池田博明・中山美和・稲葉茂代

Population of *Coelotes luctosus* in winter,  
at Kamikisawa, Hiratuka city, Kanagawa Prefecture

Hiroyoshi Ikeda, Miwa Nakayama and Shigeyo Inaba

### はじめに

筆者らは、小松敏宏(1942)によるメガネヤチグモ *Coelotes luctosus* の交尾行動の実験を追試するかたわら、野外における生活史を把握する目的で神奈川県平塚市上吉沢で越冬期のメガネヤチグモ個体群の齢調査を行った。その結果から、本種の交尾期を小松は春としているが、筆者らは秋と推定した。実験室内での交尾実験については別に報じた(中山・池田・稲葉, 1991)。なお、調査は池田・稲葉が小田原城内高校勤務、中山が同校生徒だったときに行なったものである。

### 調査方法

調査は、神奈川県平塚市上吉沢で1988年12月8日に行った。ここでは人家のコンクリートブロック塀の窪みや明け取りの窓の隅にメガネヤチグモが営巣していた。ブロック塀にそって、すべてのメガネヤチグモの営巣個体を捕獲し、CO<sub>2</sub>で麻酔し、性と齢を査定し、体長を測定した。麻酔が覚めた後、クモは元の巣へ返した。

### 結 果

ブロック塀にそって、92.50mの範囲を住居巣を手がかりに調査した結果、メガネヤチグモを45頭発見できた。したがって、この区間の個体群密度は0.49頭/mとなる。ただし、密度は均一ではなく、前半では0.33頭/m(66.8mの区間に22頭)、後半では0.89頭/m(25.7mの区間に23頭)であった。前半は普通住宅の塀だが、後半の塀は牛小屋に接している。

45頭のうち幼体4頭は体長を測定する前に逃走したため、測定できた41頭の齢別の内訳は、メス成体5頭、メス亜成体4頭、幼体32頭であった。この日はオス成体は1頭も発見できなかった。しかし、1989年の12月には牛小屋でオス成体1頭を発見している。

体長別の個体数をグラフに表した(図1参照)。11.25mm以上の個体は成体メスであり、8mm以下の個体は幼体であった。幼体のサイズのピークは6.5mmにあり、4.20mm~8.00mmまでバラつきがあった。亜成体メスのサイズは9.00mm~11.00mmの範囲にあり、幼体のサイズとの間にはギャップがあった。

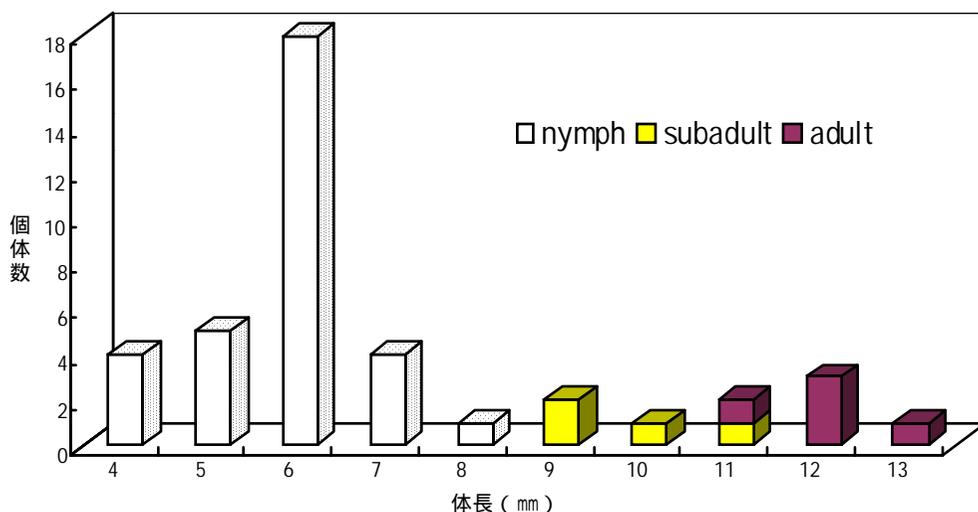


図 1. メガネヤチグモ越冬個体群 (体長別)

同じ場に生息していた他種のクモは、コクサグモ *Agelena opulenta* 3 頭、ネコハグモ *Dictyna felis* 1 頭、センショウグモ *Ero japonica* 幼体 1 頭だった。ところどころに見られた空き巣は、コクサグモ、ネコハグモ、ヒラタグモ *Uroctea compactilis*、ヤチグモの仲間のものだった。

#### 考 察

長野県諏訪市で小松敏宏は、本種の交尾期を 1~2 月としている。しかし、筆者らは 9 月下旬から 10 月の間に最終脱皮をした個体は 11 月中旬には交尾することを飼育によって確認した(中山ほか, 1991)。また、谷川明男氏の記録によると、1986 年 10 月 12 日に山梨県で採集したメスが翌春 3 月 5 日に受精卵を産卵, 1987 年 2 月 7 日に神奈川県横浜市野庭で採集したメスがそのまま同年 3 月 17 日に受精卵を産卵, 1987 年 2 月 9 日に千葉県で採集したメスが同年 4 月 21 日に受精卵を産卵している(谷川私信)。これらの成体メスは採集時には交尾していたと考えられた。本調査からは越冬期にオスがほとんど見られないことが分かった。こういったことからすると、メガネヤチグモの交尾期は主に晩秋とするのが妥当であろう。

越冬期 12 月に、野外のオス成体は 1989 年には、牛小屋の外壁の棧に営巣していた 1 頭が見つかったので、冬を越すオスも少しはいると考えられる。ただしこのオスは室内飼育では数日後に死亡してしまった。

越冬個体群のうちの幼体は、今春生まれで、翌年の秋までに成体になる個体であろう。小松(1942)は長野県諏訪市で「初夏ふ化せる若グモは母グモの巣内あるいは独立生活により 7mm 程に発育し、そのまま越冬して次の年は完全な独立生活をなし、秋または初春早々成熟」と記している。この記述は今回の結果にほぼ当てはまるものと考えられた。

筆者らは幼体に見られるサイズのバラつきにはふたつの点で重要な意味があると考えている。

ひとつには、これらのバラつきは母グモの子育て（小松，1942．谷川・堀，1987）時のバラつきをある程度反映しているのではないかということ，もうひとつにはこのようなバラつきが翌年の成熟時期のバラつきの原因になるのではないかということである．幼体が独立生活を始めてからの餌の採れ方も関係するだろうし，母グモの保育が幼体の初期成長にどの程度影響をもたらすかがじゅうぶんに明らかではないのだが．

越冬期にまだ成熟していない亜成体メスはおそらく成熟時期が遅れてしまった個体であろう．オスがほとんど生存していない状況からすると，翌春に成体になってもこれらのメスには交尾相手がないはずである．これらのメスは翌年の秋まで生存して首尾よくオスと交尾できるのだろうか．

#### 謝 辞

採集・飼育データを参照させて下さった神奈川県立野庭高等学校（現任：七里ガ浜高等学校）の谷川明男氏に感謝します．

#### 引用文献

- 小松敏宏，1942．カキネグモ *Coras corasides* (Bösenberg & Strand)の習性．*Acta arachnol.*, 7:1 - 6.
- 中山美和・池田博明・稲葉茂代，1991．メガネヤチグモの求愛行動と雄の交尾後ガードの観察．*Atypus*, (98/99):27 - 32.
- 谷川明男・堀由起子，1987．メガネヤチグモにおける子育ての観察．*Atypus*, (90):15 - 17.
- 吉倉 真，1987．クモの生物学．613p．学会出版センター，東京．